

**研究主題****自閉症の理解と支援のあり方****～子どもからのかかわりを育むために～**

**要約：**知的障害を伴う自閉症のある子どもが、自ら人や活動に対してかかわるための支援について、実践事例を通して考察した。自閉症は脳機能の障害であり、そのため物事の感じ方、理解の仕方、行動に違いが出てくる。周囲の出来事が理解できず不安感をもって過ごしている子ども達に、本人の理解が深まるよう、安心感をもつことができるよう、支援していくことが大切である。子どもの姿を見つめ捉えるには、自閉症の特性を理解する必要がある。その上でコミュニケーションの二側面の視点を持ち、その子どもがもつ特性を意識しながら、環境を整えたりかかわったりすることが、子どもからのかかわりを育むためのよりよい支援につながる。

**キーワード：**自閉症の特性の理解      脳機能の障害      安心感      コミュニケーションの二つの側面  
子どもからのかかわり

**I 主題設定の理由**

知的障害養護学校に通う児童生徒の中には自閉症のある子ども達がいる。子どもの姿から発見や喜びを感じることも多いが、一方で子どもたちの行動がどうして起きたのかわからないことがあった。また、子ども達とよりよいコミュニケーション関係を築きたいと思いつつも、どのようにかかわればよいか、わからなくなることもあった。

これまでの自分の取り組みを振り返ると「なぜ」と思うことが多かった。しかし、そこから子どもにどのようにかかわったらよいかという考えにつながらなかったように思う。それは自閉症に対する理解が足りなかったことや、どのようにしたらいいかという視点の幅が狭かったからだと考えられる。

子どもの主体的な取り組みへの支援を行うことは、特殊教育の視点として大切なことである。自閉症のある子どもへの支援においては、特性を意識して活かしていくことが必要である。そこで、自閉症の特性を理解し、その特性に応じた支援に関する知識や考え方を学ぶことで、子どもの姿を理解し、よりよいかかわりができるようになりたいと考え、本主題を設定した。

**II. 研究の目的**

自閉症の概念や、コミュニケーションの捉え方についての理解を深め、子どもが自ら人や活動に対してかかわるための支援を、実践を通して検証する。

また、子どもの捉えや支援を考える視点を広げるため、アセスメントや指導技法についても理解を深める。

**III. 研究の方法**

1. 自閉症の概念や、コミュニケーションの捉え方などについて理解を深めるため、文献やWebページ等で調べる。
2. アセスメントや指導技法について理解を深めるため、その目的や特徴を文献で調べまとめる。
3. 心理検査において特徴をまとめると共に、検査器具を使い実施することで、検査方法等を理解する。
4. 文献などで学んだことを実践事例を通して検証する。事例ではビデオ分析を行い、子どもの姿の変容を捉える。

**IV. 研究内容****1. 自閉症の理解****(1) 自閉症とは**

自閉症とは、乳幼児期（通常3歳以前）に発症し、行動の特徴から定義される症候群。国際的な診断基準であるDSM-IV-TR（精神疾患の分類と診断の手引き第4版新訂版）では三つの領域から定義されている。

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>① 対人的相互反応における質的な障害</li> <li>② コミュニケーションの質的な障害</li> <li>③ 行動、興味、および活動の限定された反復的で常同的な様式</li> </ol> |
|--|

行動の特徴には個人差があり、発達レベルや年齢と共に変化することもある。

自閉症の心理・行動を理解するときには、井澤(2003)\*1の階層構造的な考え方が有用である(図1)。

つまり、脳の生物学的な器質的障害が基礎にあり、それが認知的な特性を引き起こし、様々な行動特徴を表すのである。生物学的レベルにおいて自閉症が治るということはないが、支援や環境を整えることによって、社会的不利などを軽減することはできる。

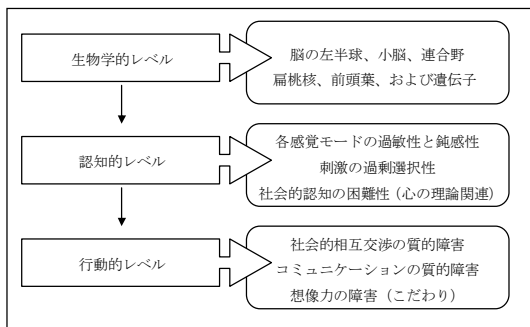


図1 自閉症の理解  
「障害者の発達と教育・支援」(山海堂)より

## (2) 自閉症の特性

### ①行動の特徴

診断基準に基づき行動の特徴を述べる。

#### ・対人的相互反応における質的な障害

他者との社会的関係の形成の困難さのことである。顔の表情や身振りなどから他者の気持ちを読みとることに困難があったり、年齢に応じた対人関係を築くことが難しかったりする。

#### ・コミュニケーションの質的な障害

意思伝達の困難さのことである。発語があまりみられなかったり、あっても会話が続かなかつたりする。また、相手の言葉をそのまま繰り返したり、独特のイントネーションがみられたりすることもある。

#### ・行動、興味及び活動の限定された反復的で常同的な様式

強いこだわりや固執行動・常同行動のことである。関心が狭くてパターン的であったり、予定の変更を嫌がったり、些細な変化を嫌ったりする。また、くるくる回る、手のひらをかざす、特定の物だけに興味を示すなどの様子が見られることもある。

### ②その他の特性

子どもの行動を理解しようとするとき、その背景となる認知の特性を理解する必要がある。認知の特性を併せて考えることで、行動の意味を理解し、そこから支援へとつなげていくことができる。

特性には、感覚障害、能力の不均衡さ、不安感の強さ、人の気持ちを読むことが難しい、情報処理の違い(視覚、聴覚刺激の選択性の難しさ、視覚情報の優位さ)などがある。

### ③理解と支援

自閉症の特性を理解することで、その子どもが感じている困難さを理解することが大切である。その上で環境を調整するなどの配慮や、本人にとって困難性の少ない手段の獲得に向けて支援をしていくのである。

子どもの見え方感じ方を尊重し、困難さを減らすような支援を行うことで、子どもは安心して過ごすことができる。そこで初めて、子どもが自ら外の世界に向かってかかわろうとする気持ちが生まれてくる。また、特性の現れ方は子どもによって様々である。その時のその子に応じた支援を柔軟に考えていくことが大切である。

## 2. コミュニケーションの支援

### (1) コミュニケーションの定義

「話し手は自らの観念(伝えたい事項)を何らかの記号媒体(通常は言葉)を通して聞き手に伝え、聞き手はその記号媒体(言葉)を通して話し手の伝えたい観念を把握する。そして今度は話し手と聞き手が役割を交替して再びこの流れが展開される。」

「肢体不自由児のコミュニケーションの指導」(文部省)より

### (2) コミュニケーションの二つの側面

「伝えること、理解すること」を  
意図するコミュニケーション  
「気持ちや感情を共有すること」を  
意図するコミュニケーション

コミュニケーションの発達段階の初期においても、未熟な段階とはいえ「伝えること理解すること」の側面と「気持ちや感情を共有すること」の二つの側面を有している。発達に伴い「伝えること理解すること」の側面が、コミュニケーションにおける主な役割を担うようになる。しかし「気持ちや感情を共有すること」の側面はコミュニケーションを支える土台として存続するものであり、子どもとのかかわりにおいて大事にしなければならないものである。

### (3) コミュニケーションの発達段階

言葉以前の伝達意図の発達に着目し、研究したベイツはコミュニケーションの発達を3つの段階に分けた(表1)。

表1 コミュニケーションの3つの段階

聞き手効果段階:	生後すぐから10カ月頃まで 意図は聞き手(大人)によって解釈される
意図的伝達段階:	10カ月～1歳頃に始まる 意図を行為で伝えられるようになる
命題伝達段階:	1歳～1歳4カ月頃に始まる ことばで伝えられるようになる
	※月齢は健常発達のめやす

「実践インリアル・アプローチ事例集」(日本文化科学社)より

それぞれの段階において、大人からの働きかけの中で大切にしたいことには少しずつ違いが見られる。子どものコミュニケーションの発達段階を知った上で、かかわりの中で大切にしたいことを意識していくことが必要である。

### (4) 自閉症とコミュニケーション

#### ・伝え合う関係を理解することの難しさ

自分の行動が相手に、相手の行為や言葉が自分にそれぞれ影響を与えるという伝え合う関係そのものを理解することが難しい場合がある。

#### ・ノンバーバルコミュニケーションの難しさ

アイコンタクトがコミュニケーションへとつながることが難しい。また、身振りを使って伝えたり、理解したりすることも難しい。

#### ・音声言語の理解・表出の難しさ

言葉を周囲の音の中から情報として選択することが難しかったり、言葉の意味がわからなかったりす

る。また、表出においても、発語があまりみられない、一方的な話し方でやりとりとして成立しないなどの様子が見られる。特徴的な言葉の使い方が見られる場合もある。

・共同注意の難しさ

共同注意とは自分の興味・関心を向けている物に対して、他者の注意を向けさせようとする行為のことである。これは物を媒介として他者と共感したいということの現れである。自閉症のある子どもの場合、共同注意の発達が難しいと言われている。

(5) コミュニケーションにおける支援

副題の「子どもからのかかわり」という言葉には、子どもが必要な時に、主体的に人や活動にかかわってほしいという思いを込めている。主体的とは、自分でわかって納得して、ということである。そのためには伝えること、理解することに対する支援が必要である。

また、気持ちや感情を共有することの側面について、自閉症のある子どもにとって共感難しいとされている。しかし、この側面を「人とのかかわりの中で安心感を感じるようなやりとり」と捉えるならば、そのための支援は大切であり、丁寧なかかわりが必要である。

次に、コミュニケーションにおける支援を考えていく上での視点をあげる。

① 大人のかかわりを見直す

コミュニケーションは二者間において成り立つものである(図2)。大人がその子どもに対してわかりたい、伝えたいという気持ちをもってかかわり、常に自分のかかわりを振り返ることが大切である。

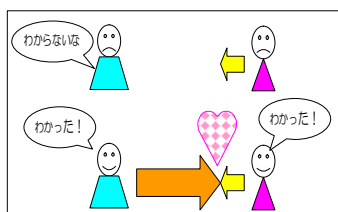


図2 コミュニケーションとは

② 「伝えること・理解すること」への支援

・「理解すること」への支援

「わかった」と子どもが感じる経験をもつことが大切である。子どもが受信することができる水準を確かめながら、子どもに合った方法で伝える。また、明確に具体的に伝えることも大切である。

・「伝えること」への支援

「伝わった」と子どもが感じる経験をもつことが大切である。子どもの発信の意味を捉え大人が返していくことで、働きかけて伝わったという経験をもつことができる。また、今できることでわかりやすく伝えることができる手段を教えることで、伝えることの便利さを子どもが理解する場合もある。

③ 「気持ちや感情を共有すること」への支援

子どもの自らの行動に、大人が共感的にかかわる。そのかかわりを繰り返すことで、かかわる大人の存在に気づき、共に過ごす人への安心感も生まれる。

④ 構造化とAAC

構造化とは自閉症の特性を理解したうえで、周り

が自閉症のある人に理解しやすい環境を設定するための工夫をすることである。またAAC<sup>※1</sup>は話しことばに拘らず、今ある能力やカード、機器などの道具を使い、コミュニケーションを可能にしようとする考え方である。いずれも自閉症の特性を活かし、伝え合う関係を大切にす支援の考え方である。

3. 実践事例

- (1) 目的：子どもからのかかわりを育むために、コミュニケーションの視点から行った支援について、事例を通して検証する。
- (2) 対象児童：養護学校小学部児童
- (3) アセスメント

教育の分野におけるアセスメントとは、支援を必要とする子どもの状態を理解するため、その子に関する情報を様々な角度から集め、その結果を総合的に、整理、解釈していく過程のことをいう。方法として問診、行動観察、知能検査や発達検査など標準化された心理アセスメントなどがある。事例においては担任からの情報、行動観察、心理アセスメント(NCプログラムやPEP-R等)から情報を得た。

- ・自ら人へかかわることが少ない。人から働きかけると拒絶したり力が発揮できなかったりする。興味のあることは意欲的に取り組む。(行動観察、担任からの情報より)
- ・項目間において幅がある。表出に比べて理解に困難が見られ、人とのかかわりにおいても困難が見られる。目で見えて操作する活動は得意である。(心理アセスメントより)

<支援の方向性>

- ・見通しをもつことができるように環境を整える。
- ・伝わったという経験を持つことができるよう場面設定する。また困難性の少ない手段の獲得にも取り組む。
- ・子どもが取り組んでいる活動に大人が参加し、一緒に活動する経験を取り入れる。

(4) 指導時数 週1回 合計12時数

(5) 指導目標

- ・1時限のスケジュールがわかり、見通しをもち活動に取り組む。
- ・カードを手渡し、要求を伝える。
- ・活動の中で側にいる人を意識したり自らかかわったりすることが増える。

(6) 指導内容

- ① スケジュールの意味を理解する。
- ② P E C S<sup>※2</sup>の手法を取り入れ、児童自ら発信できる手段を獲得する。
- ③ 人とかかわりながら活動に取り組む。

(7) 結果と考察

① スケジュールの意味の理解

スケジュール表を用意し、取り組んだ(写真1)。今から行う活動には矢印のマークをつけ、終わった活動のカードはおしまい箱に入れた。動作を伴うことで理解しやす



写真1 スケジュール表



図3 「べんきょう」の課題提示

てわかるような提示の工夫を行った(図3)。このように提示することで、自分で課題をもってきて、取り組むことができた。また、課題内容の変化も、柔軟に受け入れるようになった。

## ②PECSの取り組み

コミュニケーションブックを作成しカードを用意した(写真2)。PECSの指導法に基づき、担任と二人体制で指導を行った。カードを渡すことで欲しい物をもらったりは、本児にわかりやすく、自ら注意喚起のための発声もするようになった。



写真2 コミュニケーションブック

また、コミュニケーションブックを教室にも置き、使う場面を設定すると、指導時間と共に普段の学校生活でもこの手段を使用するようになった。

指導時間における、本児の自発コミュニケーションの数と手段の変化を示す(図4)。このグラフから自発コミュニケーションの回数が増えていることがわかる。

これは伝えることの意味がわかり、便利さに基づき始めていることの現れと捉えている。また、本児が音声言語で伝える場面も増えてきたことが伺える。PECSの

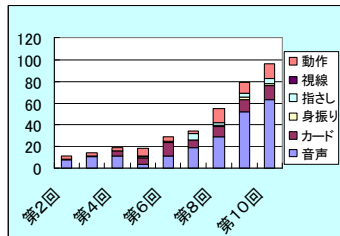


図4 コミュニケーションにおける手段の変化

取り組みは、本児の場合、伝えることの意味を理解すると共に、音声言語をコミュニケーションに使うことの便利さに気づくことにもつながったと考えられる。

## ③一緒に楽しむ活動を設定

本児が、好きな活動を選び遊ぶ時間を設定した。選んだ物は、電話帳、ブロック、ままごと、粘土などであった。遊ぶ様子を見ながら、本児のしている物と一緒に見たり、遊び方を真似たりしてみた。そして子どもの行動にあわせて共感的な声かけをしてきた。最初は気にとめない様子であったが、徐々に子どもの方から、「おさかな」や「きゃべつ」といった今遊んでいる物の名前を言うようになり、その言葉に対して大人も「おさかな」などと返すようにした。また、遊びの

かったようである。

1時限の活動の流れに見通しをもつことで、スケジュールにおける一つ一つの活動に落ち着いて取り組むことができた。

また、それぞれの活動について、何をどれだけすればよいか、見

中で、ままごとのお皿を渡したり、大人が作った物を見て、自分も真似て作ったりと自分から大人にかかわる姿が見られるようになった。

指導時間における本児の自発コミュニケーションの機能の変化、つまりコミュニケーションする時の目的の変化を示す(図5)。授業開始の頃は全体に要求の占める割合が多かった。しかし本児から要求ではない名詞の表出や「できた」などの表現が出てくるようになり、このような表現を「コメント(叙述)」として数えた。コメントが増えてきたことは側にいる人を意識する気持ちが育っていることの現れと捉えている。また、先に述べ

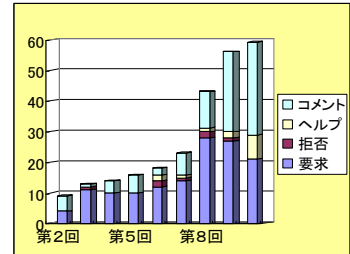


図5 コミュニケーションにおける機能の変化

たやりとりのように、同じ物を見て、本児が発した言葉に対して大人が共感的に返す場面が増えたことは、気持ちや感情を意図するコミュニケーションを育む上で、意味のあることだと考えている。

## V. まとめと今後の課題

### 1. まとめ

本研究では、自閉症のある子どもが、自ら周りの人や活動にかかわることを育むための支援について探ってきた。その結果、以下のような結論を得た。

自閉症の特性を理解し、子どもの実態を的確に把握し、その上でコミュニケーションの二側面を意識して支援を行うことは、子どもからのかわりを育むために大切である。

### 2. 今後の課題

自閉症の特性の現れ方は子どもによって様々である。特性を知識として知るだけでなく、支援に活かしていくために、子どもの姿を捉える力をこれからも高めていきたい。また、支援を子どもの実態に応じて行うため、常に変更を念頭におき、柔軟なかわりができるように心がけていきたい。

今回の実践では、対象児童の担任と共に取り組んできた。お互いに情報を交換しあいながら、子どもの姿を捉え、共通理解のもと、クラスでの指導と個別指導で取り組むことができたことは有意義であった。よりよい支援のためには、かわる大人が話し合いを通してより多角的な視点で子どもの姿を捉え、共通理解して取り組むことが必要である。

<参考文献>

\*1 井澤信三 (2003) 「自閉児の発達と教育」『障害者の発達と教育・支援』山海堂

<脚注>

\*\* AAC: Augmentative&Alternative Communication [拡大・代替コミュニケーション] と訳されている。

\*\* PECS: (the picture (絵) exchange (交換) communication system) 絵カードとこれが意味する物を交換してコミュニケーションするシステム。大人からの促しに頼るのではなく子どもから始める意味のあるコミュニケーションに着目している。